

【学級通信】

生活教育の実践にある程度共通している特徴は、学級通信の発行です。夏の研究会に、毎年製本してずつしりとした学級通信を携えてくる教師は多いし、実践レポートや実践記録についている資料や写真は、日ごろの学級通信からとってこられていることもよくあることです。

ほとんど毎日発行されていることが多いのですが、ここには日々の子どもたちのきらつと光る姿があふれんばかりに描かれています。そして子ども自身が書いたものがどんどん載せられています。授業中の子どもの発言やノートに書いたもののコピー、授業の参考資料など、授業の様子がよくわかることも特徴です。最近では、デジカメでとった板書が載るなど、授業にライブで参加する感覚も味わえます。

特に小学校では、問題などが載ったいわゆる「授業プリント」と融合しているものも多いし、朝の会やスピーチの会で、学級通信を読み合わせることからはじまる実践もあり、教材や生活材を兼ね備えていること

生活教育 キーワード

もあります。同じ題材がちがう授業でも意識されていきます。そしてそれがそのまま実践の記録として残っていきます。

これらには、生活綴方つづりかたやフレネの自由作文の影響も指摘されますが、実践的にわかりやすいのは、保育園の連絡帳との連続性ではないでしょうか。子どもを真ん中にみながら子どもたちの成長する姿を見合う、子どもの声を聴きあうことが形になったものが連絡帳であり学級通信であるといえます。

文化史的にみると、心が動いたときにそれを歌に詠む、日記に書きとめるといような日本文化の伝統が、今の教育現場に現われているものが学級通信だとも考えられます。

(研究部・加藤聡一)

参考文献

- ①丸木政臣『丸木政臣歌集 あの手空を』本の泉社、二〇〇二年。
- ②高橋睦郎『読みなおし日本文学史―歌の漂白―』岩波新書、岩波書店、一九九八年。
- ③古橋信孝(のぶよし)『日本文学の流れ』岩波書店、二〇一〇年。